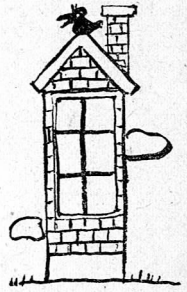
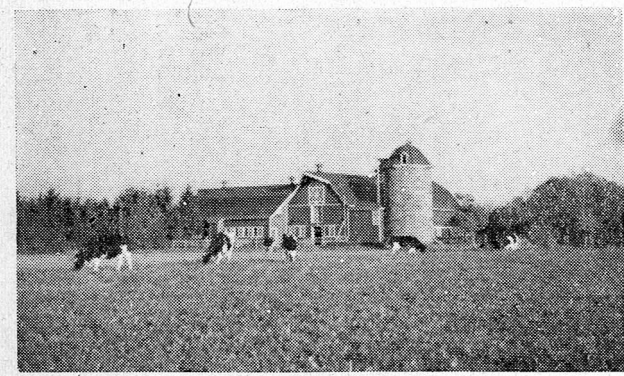


牛をつくる牧草



宇都宮 勤

私の飼料作物の栽培に対する考え方は、一般の酪農経営の場合と異なり、牛をつくるのが目的で、その牛を健康に育てるため、いわば已むを得ず必要な飼料の生産をするというようなことになっています。つまり、良い牛をつくるために牛の好むものを牛の欲しいだけつくりたい、そのために飼料作物の種類を選び、そのために作付面積をきめ、そのために土地をこやすというわけで、耕地の大部分が飼料作物のために提供され、いわゆる換金作物のための畑は一反もない有様です。しかし一般酪農経営をされる方々は勿論これではいけないので、先ず土地をこやすことに目標をおき、乳牛と地力の増進をむすびつけて作物の増収を図り、経営を合理化するよう考えるべきでしょう。



宇都宮牧場の牧草畑

なく、脚などもしつかりしているようですが、日本の場合は一般に早熟で寿命が短かく、産を重ねるにつれて能力が低下し、脚も非常に弱々しい場合が多いようですが、これは矢張りいわゆる濃厚飼料を与えずに、良い粗飼料が全般的に不足している証拠ではないかと思われまふ。一般には乳は

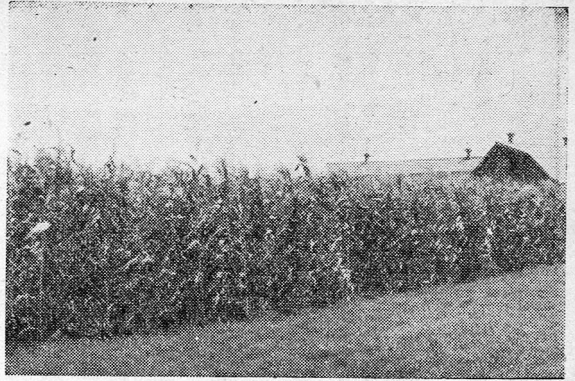
濃厚飼料によつて出るかの如く考えられていますが、これは誤りで、乳は粗飼料によつて生産され、濃厚飼料はその不足分を補うものと考えべきです。牛は元来自然の状態では草のみ食べて生きていたことを考えれば当然のことで、その草の中には牛の健康維持に必要な要素が最も都合よく含まれていることは、はつきりした事実だからです。そこで私の処では、とにかく良い粗飼料を充分つくりたいという考えのもとに年々の飼料作物の作付をきめています。現在の耕作面積は約二十三町歩で、種牡牛、搾乳牛等ふくめて約四十頭の牛に対し、大要次のような組合わせで飼料作物を作つています。

| | |
|--------|------|
| デントコーン | 七町五反 |
| 牧草 | 九町五反 |
| 燕麥 | 三町五反 |
| 根菜類 | 七反 |
| その他 | 一町八反 |

粗飼料の主体は、一般にはデントコーンですが、勿論これだけでは真の牛の健康維持は面倒で、どうしても良質の牧草が必要です。したがつてごらんのとおり牧草とデントコーンが飼料作物の大部分を占めているわけです。

デントコーンについては、生草収量も多く熟期も適切という点から、山形産のエロデントコーンを愛用しています。これは地域により差があると思いますが、札幌近郊では、私の経験からは山形産が、その熟期の点から最適のようで、千葉産はやや遅く、岩手産はやや早きに過ぎると思われまふ。反収は一千貫以上を目標としており、

七町歩はサイレージとし、ほとんど年間を通して給飼しています。五反歩は天候その他の災害を見込み予備として青刈か乾草として利用しています。最近アメリカではデントコーンにもハイブリッドコーン(一代雑種)が広く利用されているようで、私の経験からもなかなか良いように思います。数年前まで二、三年間、アメリカの知人から僅かですがハイブリッドコーンの種子を送つてもらい試作していましたが、これは細莖の割合に丈もよく伸び、特に節間が短かくて葉数が多く、葉幅、葉厚も大で、子実も下方について早熟であり、しかも倒伏も少い特性をもつており、まことに望ましいものでした。今後、日本にもこのような能力の高いハイブリッドコーンが広く利用されることを大いに期待しています。牧草としては赤クロバーのみを作りたいのですが、ここは風が強く倒伏して品質低下の憂が多いので、チモシーと赤クロバーの混播で、チモシー種子の入手のできない時はオリーチャードグラスを用いています。大体三、四年目に更新の計画で、年々二、二、五町宛新播しています。混播量は赤クロバー反当二・五町、チモシー反当三町です。播種後二年目は赤クロバーが主体、四年目にはチモシーが主体となります。九町五反のうち七町歩は乾草とし、二町五反歩は青刈として給飼しています。青刈のうち五反はルーサン(アルファルファ)です。牧草としては、この土地気候では矢張り赤クロバー、チモシーが最も栽培しやすいのですが、今後は更に質と量の向上を考えますと、このルーサンに力を入れたいと思つて



飼料作物栽培状況

ず、暫くあきらめていましたが、最近はや
々の堆肥の施用と炭酸石灰の施用により地
力もつき、酸性も矯正されたようで、ルー
サンの生育も良好になってまいりましたの
で、いよいよ本格的にとり入れようと考
えています。なお、ルーサン栽培に当つての
注意としては、初めての土地では根瘤菌の
接種が必要であり、また多年草ですから、
畑の事前の準備と場所の選定には特に計
画的な考えが必要かと思ひます。

います。ルーサンは赤クロバより収穫時
期が早く、また刈取後再生力も強く収量も
多く、その蛋白質及びカルシウムの含量
も極めて豊富ですから、今後は畑の準備が
でき次第、さらに増反したいと思つていま
す。私の父が札幌郊外で農場を経営してい
た頃、父は赤クロバよりむしろルーサン
を礼讃の方で、また事実当時の畑のルーサ
ンは素晴らしく生育していたのを覚えてい
ます。当時父はカキガラを多量にとりよ
せ、ルーサンを播く畑に、畑の表面が白くな
るほど撒いて鋤起していたのですが、こ
のカキガラが酸性土壌の矯正と石灰の補給
源に大いに役立っていたので、このような
素晴らしい生育をしたのでしよう。私がこ
こへ来て早速ルーサンを試みましたが、当
時ここは酸性の矯正も地力の向上もできて
いませんでしたから、思うような成績も出

1チャードグラスも開花前に刈取るのが一
番良いようです。燕麦は青刈用として一町
牧草として二―三町を作ります。青刈は、
赤クロバの二番草が伸びるまでの中間に
刈るのが目的で蛋白源としてコンモンベツ
チ反当三・五升の割で、七月十五日から八月
十日頃まで、赤クロバ二番草の青刈前に
利用するのですが、栽培も容易で収量も多
く、利用価値も高いようです。牧草混播用
の燕麦は、牧草更新の目的で赤クロバ、
チモシーを混播し、燕麦は子実を収穫利用
しています。

赤クロバは、やはりなんと言つても北
海道の適牧草だと思ひますが、ルーサンと
赤クロバを組み合わせて、年間連続して
青刈飼料をとり、質量共に豊富な粗飼料を
生産したいと思うわけです。赤クロバに
ついては、その種子の産地によつて若干能
力が異なるようで、将来は真に北海道に適
する、生長の早い、病害に強い赤クロバ
の出現を期待すると共に、現在の赤クロバ
でも刈取時期をもつと適切につかんで、
赤クロバの威力を最大限に發揮するよう
にしたものだと思います。私のところで
乾草のための赤クロバの刈取開始の適期
は開花一割の頃で、この時期は乾燥しにく
く、手間がかかると考えられていますが、
量、質共に最適で、しかも損失が少なく、
牛の嗜好も最良で、濃厚飼料の節約にもな
るのです。せつかくよい赤クロバでも、
刈取期を誤つたのでは、せつかくの赤クロ
バが泣くことでしょう。

根菜は牛の冬季の保健大いに役に立ち
ます。牛の嗜好も良く消化をたすけ、ビタ
ミンの含量も高いので、給飼した効果も明
らかにうかがわれます。現在七反程度です
が、将来は畑の除草が完成すれば更に増反
したいものと考えています。品種は道産の
シュガーモーゴルド及びパールの二つ
を用いており、反収三千貫を目標としてい
ますが、根菜については本場のデンマーク
産のものには良いがあるようで、数年前
デンマークから来たもので、形、色もよく
そろい、葉がいつまでも青々として、褐斑
病につきよく、収量も在来のものとの三割ほど
も増収を見たものがありました。このよう
な品種の普及をこれまた期待していま
す。なお、ビートの褐斑病の予防は必要で、
褐斑病のため葉が枯れ落ちたようなビート
は牛の嗜好が非常に落ちることを私は体験
しています。

で、このために生産された堆肥をデント
コーン畑には少くとも反当八百貫、根菜畑
には反当千二百貫を施し、牧草は更新に当
り、あらかじめ除草を充分に行い、堆肥は
はもろろん、酸性矯正、石灰補給のため、
反当一トンの前後の炭酸石灰をほとこし、数
年間の採草に堪えるように準備をするのみ
ならず、採草地としてからも牛尿、化学肥
料の追肥を行い、絶えず生産量と質の向上
に努力をしている次第です。

このような経営を繰返し、昭和二年以來
牛がふえては土地が肥え、土地が肥えただ
け牛がふえて、戦前最高五十一頭まで飼育
しましたが、戦時中資材の不足から地力が
低下し、牛も二十頭にまでへりました。

最近再び資材の出廻り復活と共に、地力
も回復し、牛も四十頭を飼うことができる
ほどになつたわけですから。将来は六十頭を維
持したいのが私の念願で、そのためには現
在より更に良い粗飼料を準備して、六十頭
の牛を常に健康に育てたいと考えていま
す。今後の問題としては、作業の機械化や
牧草の人工乾燥等も考えられますが、何と
かして、基礎となる良い牛の基となる良い
粗飼料、これを生産する良い土地を先ず完
成したいものと考えています。

目先のそろばんのみはじて良い粗飼料
を忘れ、濃厚飼料のみにたより牛の健康を
そこない、牛の真の能力を出せず、畑もこ
えずというふうなことにはなりたくないも
のです。

良い土地、良い草、良い牛。
そしてこれを完成するのは、長い将来を
考えた着実に歩む良い人ではないでしやう
か。(筆者は札幌市厚別町・宇都宮牧場主)